

「原爆文学研究会」との出会いまで

相川美恵子

私が原爆文学研究会に入ったのはつい最近のことです。ですから、ここでは、研究会に出会うまでのことを簡単に書きました。

1

娘が五年生になったのと学費が貯まったのとで、おずおずと「学問」の門をたたきました。で、すぐに躓きました。そうするものと言われて入った場所が、今思えば、アカデミズムの中でも、たまたま、厳密な実証主義的研究を重んじるころでした。実証研究の大切さを理解するには、私はあまりに「学究生活」が浅すぎました。それでそこはそこで学びながら、別の「学び場」も探すことにしました。偶然、大型書店で派手な黄色い表紙（亡き貝塚浩画伯の絵だと後に知りました）の雑誌を見つけ、その雑誌のあとがきを頼って小さな研究会に入りました。二〇年以上前になります。研究を生業にする人と生業にしようと考えている人の他に会社員や主婦も参加していました。

次の例会には発表することになりました。私は鶴見俊輔の大衆文学論に出会ったことをきっかけに、戦時下の大佛次郎の、とりわけ少年小説を読み始めていました。周囲には大衆小説は「研究」に馴染まない、みたいな空気がまだ、なんとなくありました。さらに戦時下のさらに少年小説などということになると、亜流の傍流の派流？みたいな感じというか、少なくとも周りには、そのあたりに興味を持つ人がいませんでしたし、教えを乞う方もいませんでした。というわけで、「そんなの」でいいか、と探りを入れるように訊ねましたら、おお、それがいい、ということ、二か月後には戦時下の大佛次郎について喋りました。一時間ぐらいいかな。それから日が落ちるまで討論が続ぎ、場所を替えてさらに続けました。

例会は二か月に一度開かれました。六、七人が集まります。児童文学を専門としている者は私ひとりでした。知らない作家や知らない作品、映画などなどのあれやこれやが、国境と時代を超えタブーを超えて縦横無尽に飛び交うアナーキーな場所でした。私は自分が手加減されていることを知りつつ、それに甘えさせてもらっ

て通いました。私の知ったかぶりは見透かされていましたが見逃されてもいました。そのことに今はとても感謝しています。

夫の大病がきっかけで心身のバランスが崩れ、研究会から遠ざかっている間に会は閉じられました。原爆文学研究会に参加したのは二〇二〇年です。コロナ禍のさなか、何度も延期になった末のリモート開催の場が「初めまして」ということになりました。

2

私は一般的に児童文学と総称される領域の読物について学んできました。とりわけ児童文学では戦争はどのように表現されてきたのかということに興味をもってきました。児童文学は基本的にはおとなが子どもに向けて書きます。最近では子どもという場合でも十代半ば以降二十手前あたりまでを含めることもあります(ヤングアダルト)が、やはり幼児期から学童期の子どものために書かれた文学を外して児童文学は領域として成立しません。ですから、一般文学よりもより明確に読者を意識して作られることになります。このことは戦争をどのように描くかということに影響を、つまり制約を与えてきたと思います。

私は、児童文学の面白さを成立させている要素にテーマ性と批評性と物語性があると考えています。テーマ性は啓蒙性とかメッセージ性と言い換えてもよいと思います。日本の児童文学が欧米の児童文学に比べて際立っているとはしばしば言われるのがこれです。批評性というのは、テーマへの迫り方みたいなものでしょうか。後で補足したいと思います。物語性というのはドラマ性とかストーリー性とか言われ

るもので、平たく言えば読者をわくわくどきどきさせたり、次はどうなるのと思わせたりのことです。「少年倶楽部」などの少年雑誌を中心に戦前に活躍した作家たちの何人かは、これが抜群に上手かった。それも納得できることで、彼らの多くはいわゆる大衆文学作家と幾分蔑みを含んだ、そのくせ嫉妬も混じったニュアンスで文壇作家から呼ばれた作家たちで、新興メディアであるラジオや映画と競り合いながら必死で「波乱万丈」を書きまくっていたからです。

今、戦前の「少年倶楽部」の例を出しましたので、その流れを受けて続けます。児童文学は先に述べたように読者を強く意識する傾向がありますし、テーマ性と批評性と物語性のバランスを取りながら面白さを大切にします。それは別の視点から見ると、時代とか社会を彩る価値観や空気、それらを集約的かつ効率的に子どもたちに注ぎ込むシステムである教育の影響をより濃く受けるジャンルだということでもあります。以上は戦前の少年小説がたどった歴史が私たちに示すものですし、その教訓は今も生かされるべきだと私は考えています。

3

前置きが長くなりましたが、ここから戦争を描く児童文学が内包している問題について考えていこうと思います。児童文学の面白さは三つの要素からなっているのではないかと述べてきましたが、戦争を描いた児童文学ではテーマは明確です。戦争は悪いということを伝えようとしています。結末も予想がつきます。作品を読む前から何が書かれて最後にどうなるのがほぼ予想できてしまうのが、戦争を描

いた児童文学です。読む前から結末がわかっている物語を読むことは楽しいでしょうか。そもそも子どもたちは夢中になれる楽しい物語を読みたいのです。いつの時代もそうですが、今の子どもたちは多種多様なゲームやアニメを通して子どもたちなりの面白さの感受性を育てています。あるいは育てられてしまっています。戦争を描く児童文学は子ども読者の素朴な欲求とは乖離しています。

批評性の展開という点でも厄介な問題を抱えています。家族の在り方や自分の居場所の見つけ方といったテーマで描かれる場合と比較すればよくわかります。どちらのテーマの場合でも、正解はありませんから、書き手が自分の考えや価値観を複数の登場人物に託して自在に描くことができ、最後は読者にあずけることができます。ところが、戦争を描く児童文学の場合、正解に向かって伏線が回収されるので、一方向へ物語が進んでいくため、奥行きみたいなものが出にくくなります。

物語性についてはいわずもがなところがあります。大佛次郎の少年小説を読んでいくと、鞍馬天狗と杉作が活躍する昭和初期の『角兵衛獅子』『天狗党奇談』が突出して面白く、あとは、具体的に満州事変後ですが、急速に退屈になってきます。さまざまな浪人たちがテキトーに人助けをする話などに代わってくる。さらにはおおらかな笑いや愉快な言葉の掛け合いが楽しい物語など、まるで戦争の進展に逆行するように作品から殺気が消えていきます。物語としては腰が据わっていないというか、どこか中途半端です。吉川英治の少年小説がいよいよ熱を帯び、迫力が増してくるのは実に対照的と言えます。自ら率先して開拓した「少年倶楽部」的な面白さ——熱狂と波乱万丈の活劇——から、今度はどうにかして

脱け出そうとしている、といったところでしようか。そんな中から「自由」という、大人の小説からは消えて久しい言葉が書き込まれたりもするのです。

物語性、ドラマ性は熱狂、犠牲、献身、悲壮性などと相性がよく、それを回避して戦争の物語を描こうとすれば、退屈になってしまいます。戦争は悪いというメッセージに回収させたい作品において、いわゆる面白さをどのように扱うのかは本当に難しいと思います。被爆を描いた児童文学では、今まで述べてきたことがより顕著に認められるような気がしています。簡潔に言うと、表現の自由度が極端に狭くなってしまうというか、広がっていないような気がするのです。

けれども、ここでもう一步踏み込んで、物語性、ドラマ性について、あるいは「波瀾万丈」について、視点を変えて考えてみるのもよいかと思います。伊藤公雄さんが「少年倶楽部」に代表される戦前の軍事愛国小説の魅力を評して「政治的主体としての少年」を描いて見せた点にあると指摘したのは三十六年も前になります（「開かれた」イデオロギー装置——メディアとしての少年軍事愛国小説『口笛と軍靴——天皇制ファシズムの相貌』評論社 一九八五）。伊藤さんは、しかも、その描き方は決して一方的に作者のイデオロギーを注入するというのではなく、「作者とともに作品を創出していく中で、主体的に選びとっていく」形をとっている場合が多いのだとも続けています。私は戦後に人気を博した幾つかのアニメーション映画や漫画、キャラクター小説と総称されるジャンルの作品を思いうかべています。

戦後、日本の児童文学は軍事愛国少年小説を真っ向から否定す

る形で始まりましたし、加えて「政治の季節」と呼ばれる六十年代をくぐり生き延びなくてはならない過程において、「政治」もまた「取り扱い注意」になったのかも知れません。現在、「政治」はどこで描かれているかといえば、圧倒的にサブカルチャーの領域でしょう。私は時々思うのです。若い人は、子どもは、本当に「政治」に興味がないのだろうか。

伊藤さんの論考と並んでいつも思い出すのが野上皓さんの「ウルトラファイト」についての指摘です。「ウルトラファイト」は野上さんによると、七〇年代初めに放映された幼児向けの番組で、ウルトラマンやウルトラセブンと怪獣の格闘場面だけを抜き出して繋いだ番組だそうです。ちょうどウルトラシリーズが途切れ、一方でなぜか幼児低学年向け雑誌の怪獣企画が大当たり、怪獣のソフトビニル製人形がバカ売れした時期に、それならばと、幼児にはわかりにくいと判断された部分、つまり、なぜ怪獣が暴れ、なぜヒーローが登場することになったのかをそっくり省いて格闘場面ばかりを集めて、「プロレスまがいのナレーションをつけた」番組を放映したのです。ところが幼児はこの番組にそっぽを向いた。つまり面白くなかったわけです。野上さんによれば次の作品「帰ってきたウルトラマン」が物語性を重視するようになった背景にはこの失敗があったといえます（『子ども』というリアル——消費社会のメディアと『も』の』がたり』パロル舎 一九九八）。

4

私たちは戦争や原爆を知らない世代にそれを伝えなくてはなら

ないとよく言いますが、そもそも子ども世代は戦争を知らないということを私は疑っています。彼らは彼らなりの「戦争」「原爆」を知っているとは私は考えています。私が私なりに「戦争」「原爆」を知っているようにです（戦後生まれの私はその上の世代からは戦争を知らない世代だと言われています）。ジョージ・オーウエルの『一九八四』を読め、名作だぞなどと言われなくても、今の世代は中学生の時に伊藤計劃の『虐殺器官』（早川書房 二〇〇七）や『ハーモニー』（ハヤカワ文庫JA 二〇一〇）を読んでいるし、アニメや漫画で「核戦争」も「全体主義」も絶望も、何なら地球の破滅後の世界も、少なくとも私などよりよほどイメージとして持っている気がします。たかがイメージではないかといわれるかもしれませんが、イメージほど記憶に固着しやすいものは稀ではないかと思えます。子どもたちがメディアを通して追体験を重ね作り上げてきたイメージは嘘だとは簡単には言えないものだとは私は考えています。

彼らがそういうイメージとどんな風に出会い、それらを手はずけ、時にはよりどころや逃げ場所にすらしながら今日、明日のリアルな瞬間瞬間をいかにして生き延びているのか、私にはわかりませんが、絶望の深さという点において彼らを侮ることだけはしてはいけなそうと思えます。語る言葉を持たないだけかもしれないのですから。それどころか、もしかしたら、生きてきた時間がまだ短く、一つ一つの経験が初めての経験であったりする子どもたちのほうが、私などより孤独や生きづらさは大きいかも知れません。「あなたたちは戦争を知らないだけでも幸せではないか」という言葉の持つ暴力性に、私自身ももつと敏感にならなければと思っています。

補足してもう一つ、述べておきたいと思えます。もう、本当に身

も蓋もない言い方になってしましますが、七十年以上も前の戦争や被爆を「わかる」はずがないと私は思っています。阪神淡路大震災だつて、いえ、東日本大震災と福島第一原発事故の災禍についても、私自身、「わかっ」ている自信なんて全くありません。そんなに簡単にわかるはずがないし、わかってはいけない気がします。一人の人間の命が尽きる、そのことだけでもどう理解してよいのかわからないことなのに。

できるのは、せいぜい「わからなき」の前でじつと身をすくめて立ち尽くすことぐらいでしょうか。その意味では、私も子ども世代も変わらないように思います。

5

ある作品を読んでいるとき、私は自分の中に持っている被爆なら被爆のイメージを意識的、無意識的に動員しています。その結果としてその作品に感動したとして、それは、私の中にある被爆のイメージがより鮮明に立ち上がってきたからであつて、つまり私の中の被爆イメージを強固にすることはあつても亀裂が入ることはありません。そういう感動というものはあります。それと同じことは子ども読者についてもいえるでしょう。彼らは自分が抱えている破壊のイメージ、悲惨のイメージを自分の読みに動員してきます。そうして再確認するのです。つまりこの場合、読者の読みの主体性が十分に発揮されていることになり、結果として読者の中に「感動」が生まれます。こういう感動というものはある。

というか、多くはこういうものではないでしょうか。「これはまさ

に自分のことが描かれている、この物語は自分の物語だ」という体験がなくて、どうして人は物語や小説などに魅せられるのでしょうか。でも、読み手の積極的な介入を求めつつ、読み手の中にある既存のイメージに亀裂を入れるような作品も必要な気がします。例えば、私はなぜ、いつから障がい者≡無垢という漠然としたイメージを持つようになったのでしょうか。子どものころから観てきた映画やテレビドラマの影響でしょうか。パラリンピックの選手に対して「清廉潔白」のイメージを抱いているのは私だけでしょうか。ドーピングとも嫉妬とも名誉欲とも無縁のイメージを私はどこから作り上げてしまったのでしょうか。そういうイメージが当事者にとつてどれほど抑圧的に働いているのかも知らず、私はそういうイメージの上に胡坐をかいてきたのではないか。少なくともそのイメージの外に出ない限り、私は安全です。パッシングされることはない。

相手のことをよく知らないとき、私たちは大抵、相手のことを「良い人よ」などと言って済ませます。「良い人」にしておけば波風立たないからです。同時に「良い人よ」という場合、それ以上の関心を相手に持つつもりはないし、まして関係を深めていこうなどとは考えていないということも言外には含まれています。

これはそのまま被爆者イメージについても言えるような気がします。私は、もしかしたら、自分を安全な場所において「感動」だけをちやっかり横領してきたかもしれせん。そう考えると本当に怖いです。

そういうことを個別の作品を丁寧に読みながら考えていきたいと思えます。